

中期ハイデガー研究 (3) 「力への意志」の形而上学と人間の問題

鎌 田 学
Manabu KAMATA

はじめに

1936年から1940年の間に行われた一連の「ニーチェ講義」を経て、ハイデガーは「ニーチェの言葉『神は死んだ』」(1943年)をまとめ上げた。この論文は、後期ハイデガーの思考形態を胎しているという意味において重要であるが、しかしその分かって錯綜した内容を盛っているとの印象を与える。

そもそも、ハイデガーによるニーチェ哲学(さらにいえば西洋の哲学全体)の解釈に対する異論も少なくないのだが、しかし本論は、ニーチェとハイデガーを並べて、それぞれの言い分を突き合わせて、ここに要約しようとはしない。あくまでハイデガーの所論を幾つかの論点に腑分けし、その全体像を見渡す定点の確保を目指すものである。

まず初めに、ハイデガー自身が、ニーチェの「神は死んだ」という言葉を取り上げ、解釈を試みる理由を確認しておこう。

「ニーチェの形而上学を考え抜くということは、その命運がその真理に関していまだに僅かしか経験されていない、今日の人間の形勢と場所への省察となる。」¹

当時進行していたヨーロッパ大戦中の「今日の人間」が置かれた「形勢と場所」を考えることになるという文言からは、現状を知的に理解し将来への展望を開こうとするハイデガーの動機が読み取れる。はたして、ハイデガーはどのような見方を提示したのであろうか。

そこで、本論で行う作業を以下のように二つに分けたい。①存在史という観点から、ニーチェにおける「力への意志」の形而上学をハイデガーの所論をたどりつつ吟味する。その際、1938年公

刊の『世界像の時代』において重要になる「表象」論を引き合いに出し、価値との連関づけを行う。そしてこれを受けて、②「今日の人間の形勢と場所」とハイデガーが名づけるその深刻なる事態を見定め、「一層深い夜」における人間のあり方を考える。その地点から「ニーチェの言葉『神は死んだ』」を見渡す定点が確保されるであろう。

1 「力への意志」の形而上学

「狂気の人。君たちはあの狂気の人のことを耳にしたことがありはしないか。晴れ渡った午前だというのに、提灯をともし、市が立つ広場に走って行き、『神様はどこにいる。どこに神様はいる。』とひっきりなしに叫んでいたあの人のことを。一たまたま広場には神様を信じない人たちの多数が寄り合っていたので、その人はすぐさま大きな物笑いの種になった。では神様は消え失せてしまったのか、と或る者が言った。神様は子供のように迷子になったのか、と別の者が言った。それとも神様は隠れているのか。神様は我々が怖いのか。神様は船でお出かけになったのか、移民になったわけか。—彼らはこのように互いに入り乱れて叫び合い、笑い合った。狂気の人には彼らの直中に飛び込み、穴のあくほど彼らを睨み据えた。『神様はどこへ行ったか。』と彼は叫んだ。『君たちに言って聞かせよう。我々が神様を殺してしまったのだ—君たちと私とが。我々はみな神様の殺害者なのだ。』」²

言うまでもなく『華やぐ知』に収められた一文であるが、ここで登場する「狂気の人」は本論が後に取り上げるように、ハイデガーが言う「在来の人間」とはおおよそ種類の異なる<理想の人間>と見てよいだろう。

¹ S.210

² S.214-215

さらに、狂気の人は言う。

「提灯は朝の間からともさねばならないではないか。我々は神様を埋葬する墓掘人たちの騒々しさのことを、まだ何一つ耳にしていないのか。我々は神様の腐敗のことを、まだ何一つ嗅ぎ付けていないのか。—神々もやはり腐敗するのだ。神様は死んだ。神様は死んだままだ。そして我々が神様を殺したのだ。」³

この「神様は死んだ。神様は死んだままだ。」という発言によって、ニーチェはその固有の哲学的立場を獲得したとハイデガーは考えるわけだが、その固有性はどこにあるのかを以下検討したい。

2 ニヒリズム

ニーチェ哲学の概要についてハイデガーが下す判定は、以下のように端的に表現されている。

「『神は死んだ』という言葉は、超感性的な世界は活動力を欠いているということを意味する。超感性的な世界は活気を与えてくれない。形而上学、すなわちニーチェにとってはプラトン主義として了解された西洋の哲学は、終わりを告げる。ニーチェは自分自身の哲学を、形而上学に対する、すなわち彼にとってはプラトン主義に対する反対運動として了解している。」⁴

しかし、ニーチェが「プラトン主義に対する反対運動」をいかになそうとも、それは実は西洋形而上学の伝統の枠内で行われているとハイデガーは論断する。

「ニーチェがいとも簡単に存在、存在者、真理とか呼ぶとき、形而上学のあらゆる方向転換や価値転換にもかかわらず、どこまでもニーチェは形而上学の諸々の伝統の、開拓されたことのない路の中に留まっているのである。」⁵

ハイデガーによるニーチェ形而上学の批判については、すぐ後に立ち戻ることにして、ニーチェの言う「神は死んだ」という言葉を、ニーチェが与えた意味で理解するとどのようになるかをまず見ていきたい。

「ニーチェは1887年に書かれた或る覚え書きの

中で、『ニヒリズムとは何を意味するか』という問いを立てている。彼は答えていう。『最高の諸価値が価値を喪失すること』、と。この答えは下線で強調されていて、『目標が欠けている。なぜへの答えが欠けている』という説明的な補足があげられている。」⁶

つまり、ニーチェの意味でのニヒリズムとは、「最高の諸価値が価値を喪失すること」⁷である。

しかし、注意しなければならないのは、ニーチェの語るニヒリズムの中では「在来の最高の諸価値が価値を喪失する」だけではなく、「或る新しい価値定立 (Wertsetzung)」が、その意味で「在来の諸価値すべての価値転換」もまた問題になるということである。

さらに言えば、「在来の諸価値すべての価値転換」を行う際に、価値づけの原理がそもそも刷新されていなくてはならない。この事情をハイデガーは以下のように述べる。

「価値を転換することは価値づけることの方式と仕方との方向転換となる。価値定立は新しい原理を、すなわち価値定立がそこから出発し、その中で支えられているところのものを、必要とする。価値定立は或る別の境域を必要とする。その原理は、超感性的なものという生気を欠いた世界ではもはやありえない。それ故に、このように了解された価値転換を目指すニヒリズムは、最も生気に満ちたものを採し当てるであろう。」⁸

次に、ハイデガーの解釈に従いつつ、ニーチェが価値ということで何を了解しているのかを追跡する。

ハイデガーによれば、ニーチェにおける価値の本質とは「視点 (Gesichtspunkt) であることの中に安住している。価値とは、注視されているものを指す。価値とは或るものに狙いをつけている、または、一般に言われるように、何ものかを当てにしている、しかもその際別のものを計算に入れないと見ることができない、そういう見ることについての対眼点 (Augenpunkt) を意味する。」⁹

続けて、ハイデガーは、視点と表象しつつ定立

⁶ S.222

⁷ ebd.

⁸ S.226

⁹ S.227-228

³ S.215

⁴ S.217

⁵ S.240

する働きとの関係を以下のように述べている。
「価値は視点としてその都度、或る見ることから、この見ることのために定立されている、ということである。この見ること、それが見るのは、見てしまった限りにおいてであり、それが見てしまっているのは、見とられたものを見とられたものとして己れの直前に立てた、すなわち定立したことによってである、という方式を具備している。このように表象しつつ定立することによって初めて、或るものを狙うために必要な、したがってこの見ることの視路を導いている点が、視点となる。」¹⁰

ハイデガーのこの価値概念解釈は、次節で見るように表象（定立）論へまっすぐにつながるが、それに立ち入る前にニーチェの言う価値規定をもう一度確認しておかねばならない。

「『価値』の視点とは、生成の内部で相対的に持続する生の複合的な諸形成体を見定めたときの、維持し高揚させる諸条件という視点のことである。」¹¹

「視点」としての価値でもって、「維持し高揚させる諸条件」が定立されるが、これは「生の複合的な諸形成体」を見定める際、「視点」が見るという働きを導いていると言い得よう。また、「生成」がニーチェにとって「力への意志」を指しているがゆえに、ハイデガーは以下のように指摘する。

「生すなわち生きているものは、生成の内部において、自らを力への意志のその都度の諸中心へと形成する。したがって、これら諸中心は支配的諸形成体である。そのような支配的諸形成体としてニーチェが理解しているのは、芸術、国家、宗教、学問、社会である。」¹²

ニーチェにおいて生成と「力への意志」とが等価であることから、次のようにハイデガーは結論付ける。

「力への意志は、価値を定立することの必然性の根拠であり、価値評価の可能性の起源である。」¹³

こう言われるように、「力への意志」はニーチェ

における価値定立の原理としてはたらく。そうである限り、「ニヒリズムについてのニーチェの概念も、『神は死んだ』という言葉も、力への意志の本質に基づいてはじめて行き届いて考えることができる」¹⁴とハイデガーは指摘する。

先ほど確認したように「価値の本質は、力への意志において定立された維持と高揚の条件であるという点に表明されている」¹⁵わけだが、ニーチェにおいてそもそもこの「意志の諸可能性」を創始するのが芸術（の本質）である。

したがって、芸術の本質についてハイデガーは以下のように総括して言う。

「力への意志に基づいて把握された芸術の本質は、芸術が力への意志を真っ先にそれ自身へと至るようにと鼓舞し、己れを超え出て意欲するようにと励ます点にある。ニーチェは現実的なものの現実性としての力への意志を、早初におけるギリシアの思索者たちの ζωή, φύσις の響きの余韻を残して、しばしば生とも呼ぶのであるから、芸術とは『生の大いなる刺激剤』である、と言い得るのである。」¹⁶

「芸術は真理よりも価値が高い。」¹⁷、ニーチェはまたかく言う。

さて、ここまでハイデガーのニーチェ解釈を追跡することによって、先に示しておいたハイデガーによるニーチェ形而上学の批判について言及できるようになったと思われる。ハイデガーは言う。

「ニーチェは力への意志の形而上学をまさしくニヒリズムの克服として把握している。実際のところ、ニヒリズムが専ら最高の諸価値の価値喪失として了解され、力への意志が諸価値すべての価値転換の原理として最高の諸価値を新しく定立することから考えられている限りにおいては、力への意志の形而上学はニヒリズムの克服の一種である。しかし、このニヒリズムの克服においては、価値の思考が原理にたかめられている。」¹⁸

「価値の思考が原理にたかめられている」こと

¹⁴ S.232

¹⁵ S.239

¹⁶ S.241

¹⁷ S.242

¹⁸ S.259

¹⁰ S.228

¹¹ S.230

¹² ebd.

¹³ S.231

と同時進行しているのは、「諸価値を定立し、一切を諸価値に従って評価すること」¹⁹である。このことから、ハイデガーの立場から以下のようにニーチェの形而上学が結論づけられる。「力への意志」の形而上学において「価値が存在者の一切をその存在において規定している。」²⁰言い換えれば、存在は価値になりさがってしまっている。

またハイデガーは過激な表現を用いて、こう言う。

「もし、価値を定立することが存在者としての存在者への注視の中で、すなわち同時に存在への注視にもとづいて考えられているなら、価値を定立すること自身はどうなっているか。そのときには、諸々の価値において思考することは、根本的な殺害なのである。そのような思考は、存在者としての存在者を単にそのそれ自体において存在することにおいて打ち倒すだけではなく、存在することを全面的に取り除いてしまう。存在は、まだ必要とされるところでさえ、価値の一つと見なされ得るにすぎない。」²¹

ニーチェの思考を総括するかたちで、ハイデガーは以下のようにまとめる。

「力への意志の形而上学の価値の思考は、そもそも存在それ自身を立ち現れに至るように、つまり存在の本質が生き生きとした状態へ至るようにさせないが故に、或る極端な意味において殺戮的である。」²²

「存在の真理」の側面から言い直されてハイデガーは以下のようにも語る。

「諸々の価値についての思考は、存在それ自身をあらかじめ、存在の真理において現成する(wesen)ことには立ち至らないようにしておく。」²³

以上のニーチェ解釈を受け、それをいわば拡張して、ハイデガーは西洋形而上学全体をニヒリズムとして一括する。

「ニヒリズムとは、その本質において考えられるならば、むしろ西洋の歴史の根本運動である。」²⁴

しかも、存在という出来事からみられた限りでの「西洋の歴史の根本運動」である。

「形而上学は存在自身の歴史の一時期である。しかし、その本質において、形而上学はニヒリズムである。」²⁵

西洋形而上学がニヒリズムであらざるを得ない理由は、ハイデガーによれば次の通りである。

「西洋的な思考それ自身が、しかも形而上学という形態において、この〔存在の〕拒みという生起をことさらに、しかしそれにもかかわらず知らないままに覆い隠している。」²⁶

この「存在史」というヴィジョンから思考するなら、以下のように言われ得るだろう。

「ニヒリズムの本質は次のような歴史のなかに基づいている。すなわち、その歴史によれば、存在者が存在者として全体において現れ出ていることの中で、存在それ自身とその真理とは何のことは無い、しかも、存在の真理が現れないがために、存在者そのものの真理が存在とみなされているほどに、存在それ自身とその真理とは何のことは無い。」²⁷

3 表象論—価値との関連からみた

西洋形而上学の本性をニヒリズムととらえるハイデガーは、ニーチェをもその枠内の哲学として見て取るわけだが、そのニーチェ解釈を導いていたキー概念は価値およびその定立である。

「価値は視点としてその都度、或る見ることから、この見ることのために定立されている、ということである。」²⁸

ここで、論文「ニーチェの言葉『神は死んだ!』」に先立って公刊された『世界像の時代』を参照することで、特に近世以降において顕著にみられる学の動向をおさえつつ、ハイデガーの表象論をもとにしたニーチェ批判のもつ射程をはかりたいと思う。

そもそも1938年の論文『世界像の時代』は、「近世の学」の考察に基づいて、「近世の学」の本質にひそんでいる「形而上学的根拠」を見定めよう

¹⁹ S.257

²⁰ ebd.

²¹ S.263

²² ebd.

²³ ebd.

²⁴ S.218

²⁵ S.265

²⁶ S.212

²⁷ S.264

²⁸ S.228

とする試みである。

「学が研究になるということ、存在者のいかなる把握と、真理のいかなる概念とが基礎づけるのだろうか。」²⁹これら二つの観点からハイデガーの表象論を追跡したい。

ハイデガーの「表象」論は次のことを最初に確認することから始まる。

「研究としての認識することは、表象することにとって、存在者がどれだけ、またどの程度まで意のままにされ得るのかに関して、釈明を存在者に求める。」³⁰

自然が対象である場合、未来の過程においてそれが予測可能であるとき、また歴史が対象である場合、過ぎ去ったものとして後から数えられるときに、学は存在者を意のままにする。

しかし、肝心なのは、自然であれ、歴史であれ「存在者のこの対象化はある表象することにおいて遂行される」³¹点であり、「そのことの狙いは、すべての存在者を自らの前へ、計算する人間がその存在者について自信を持ちうる、つまり確信を持ちうるようにもたらすことである。」³²

「近世の本質」を考える際、認識する人間の規定が中世的なそれとの対比の中で語られることが多い。しかしその際、「人間が在来の諸束縛から自分自身へと自らを解放することが、決定的なことではなく、人間が主観(Subjekt)になることによって、人間の本質がそもそも変転するということが決定的なことである。」³³

「人間が第一の、そして本来の主観となるとき、このことは以下のことを言う。すなわち、人間が、一切の存在者がその存在とその真理との方式において、それに基づいているところのかの存在者になることを、である。」³⁴

「人間は存在者そのものの連繫中心になる。」³⁵しかし、こうした人間本質の変転は、「全体としての存在者の把握が変転するときのみ可能であ

る。」³⁶とハイデガーは言う。

こうして、ハイデガーは主観性の問題から出発して、存在問題をもはらむ「近世の本質」論を次のように展開する。

「全体としての存在者の把握が変転したことにしたがっていえば、近世の本質とは何か。」³⁷

「われわれは近世を思い出すときに、近世の世界像(Weltbild)について問うている。」³⁸と断りつつ、ハイデガーは「世界像」という言葉の意味規定へと議論を進める。

「世界像はいわば、全体としての存在者の絵画である。しかし、世界像はそれ以上のことを言う。(中略)像とはここでは単なる模倣を指さない。(中略)事柄それ自身が、われわれに対してそうになっているような具合にわれわれの前に立っていることを意味する。」³⁹

ハイデガーは「像」という語を含む慣用表現「われわれは或ることについて事情を心得ている、よく知っている(Wir sind über etwas im Bilde)」を引き合いに出し、以下のような解釈を披歴する。

この言い方は「存在者がわれわれにそもそも表象されているということしか指さないのではなく、存在者はそれに属するものとそれの中に一緒に集まっているものとの総体において、体系としてわれわれの前に立っているということ」を指す。(略)世界が像になるところでは、全体としての存在者は、人間がそれに対する準備をし、それゆえに人間がそれに応じて己れの前へもたらし、己れの前に所有し、よって或る決定的な意味で己れの前に立てようと欲するところのものとして、見積もられている。」⁴⁰

したがって、当然のことながら、「世界」というものの成り立ちも表象作用との相関において語られる。

「世界」という「全体としての存在者は、いまや、表象しつつ製作する(vorstellend-herstellend)人間によって立てられている限り、初めて存在者で

²⁹ S.86

³⁰ ebd.

³¹ S.87

³² ebd.

³³ S.88

³⁴ ebd.

³⁵ ebd.

³⁶ ebd.

³⁷ ebd.

³⁸ ebd.

³⁹ S.89

⁴⁰ ebd.

あり、またそのようにしてのみ存在者である。」⁴¹

以上から、近世における〈存在のテーゼ〉は以下のように定式化してよいだろう。「存在者の存在は、存在者が前に立てられていることの中で求められ、見い出される。」⁴²

ギリシア精神においては、人間は「存在者を受け取る者 (Vernehmer)」⁴³と考えられたが、言うまでもなく、これと近世的な表象することとを混同してはいけない。「表象することとはここでは、直前のものを対立するものとして己れの前へもたらし、己れへすなわち表象する者へと向けて連繋させ、尺度決定的な境域としての己れへのこうした連繋の中へ戻るように強いることを意味する。」⁴⁴

repraesentatio の語は、したがって、「人間それ自身が、存在者が今後はその中で己れを立てる、現前させる、つまり像であるのでなければならない舞台として己れを据える」⁴⁵こととして理解されねばならない。「人間は対象的なものという意味での存在者の代弁者 (Repraesentant) となる。」⁴⁶

では、本節冒頭におかれたもう一つの論点、つまり「近世の学」を基礎づける真理の概念については、どのように言うことができるであろうか。「表象するとはここでは、それ自身からして何ものかをそれ自身の前に立て、立てられたものを立てられたものとして確保することを意味する。このように確保することは、計算することではなければならない。計算され得るということだけが、表象され得るものに前もって不断に確信を抱くということを保証するからである。」⁴⁷

ここで「非秘匿性 (Unverborgenheit)」としての真理ではなく、確信 (確実) 性としての真理の概念が、表象することとともに語られていることは明らかだ。さらに、デカルトの形而上学を踏まえたうえで、「主観」概念と「根本確実性」とを同一視し、ハイデガーは以下のように言う。

「主観、根本確実性とは、表象する人間が、表象

される人間的なあるいは非人間的な存在者、つまり対象的であるものと共に、いつも確保されて一緒に表象されてある (Mitvorgestelltsein) ということである。」⁴⁸

デカルトに代表されるこの近世形而上学の原理としての確信 (確実) 性について、ハイデガーは、価値を問題化するという点でデカルトより根本的な立場に立つニーチェに沿って以下のように言う。

「真理が必要な価値の一つであり、確信が真理の近世的形態であると仮定した場合、確信は力への意志において初めて本当に創設されるのである。」⁴⁹というのも、「力への意志があらゆる現実的なものの『本質』である」⁵⁰からである。しかし、力への意志による価値定立の方がむしろ、主体性の形而上学の完成という点から判断するならば、より深刻な事態を招来していることをハイデガーは次のように指摘する。

「大地の支配を巡る戦いの開始とともに、主体性の時期はその完成へと引きこまれていく。この完成のためには、力への意志の意向を体している存在者が、それなりの仕方、自分自身に関するおのれ独自の真理をあらゆる点で確信し、したがってまた意識するということが必要である。意識化は、力への意志に基づいて欲する意欲にとって欠かせない道具の一つである。」⁵¹

さて、ここで「世界像」という場合の「像」性格について再び確認しておきたい。

「世界像とは、本質的に理解されるならば、世界についての或る像ではなく、像として把握された世界を指す。」⁵²

「像という語は今や、表象しつつ製作することによって形造られたもの全体を意味する。この形造られたもの全体の中で、人間は一切の存在者に尺度を与え、黒縄を張るところの存在者であり得る立場を求めて闘う。」⁵³

「表象しつつ製作すること」によって「形造ら

⁴¹ ebd.

⁴² S.90

⁴³ S.91

⁴⁴ ebd.

⁴⁵ ebd.

⁴⁶ ebd.

⁴⁷ S.108

⁴⁸ S.109

⁴⁹ S.239

⁵⁰ ebd.

⁵¹ S.257

⁵² S.89

⁵³ S.94

れたもの全体」とは、いいかえれば「一緒に並び立っていること、体系」⁵⁴である。体系とは、「存在者の対象性の企投にもとづいて、自らを展開する、前に立てられたものそのものにおける構造(Gefüge)の統一」⁵⁵である。「体系」あるいは「構造の統一」が「像」というものである限り、それはもはや世界についての単なる或る「像」ではないのは当然である。

また、ここで先に言われた「人間は存在者そのものの連繫中心になる。」⁵⁶という文言を思い起こそう。「連繫中心」であることからの帰結として、人間のあり方について以下のように論断される。「人間の能力の領域を、全体としての存在者を征服圧迫するための尺度と遂行の余地として占領するという、人間存在のかの方式が開始する。」⁵⁷

「かの方式」とは、これまで何度も指摘された、存在者を「把握、理解し」つつ「攻撃する」⁵⁸こともとも言い換えられるだろう。

この方式に関して、論文「ニーチェの言葉『神は死んだ』」では次のように表現されている。「人間は蜂起し始める。世界は対象となる。このように蜂起して一切の存在者を対象化する中で、前に立てることとこちらへ向けて立てることによる処理にまず最初に任せられざるを得ないもの、すなわち大地が、人間による定立と対決の中心に迫ってくる。(中略)自然は至るところにおいて、存在の本質から欲されているがゆえに、技術の対象として現れ出る。」⁵⁹

4 「狂気の人」と「今日の人間」

ここで、本論冒頭でも一部引用した『華やぐ知』のあの狂気の人を想起しよう。

「晴れ渡った午前だというのに、提灯をともし、市が立つ広場に走って行き、『神様はどこにいる。どこに神様はいる。』とひっきりなしに叫んでいたあの人」であるが、彼は「在来の人間」を越えて出ている<理想の人間>であると言ってもかまわ

ない。

「『神様はどこへ行ったか。』と彼は叫んだ。『君たちに言って聞かせよう。我々が神様を殺してしまったのだ—君たちと私とが。我々はみな神様の殺害者なのだ。』」⁶⁰

「君たちと私」が神を殺してしまったということに関して、「だが、どういうふうにしてそれをやり遂げたのか。」⁶¹という問いをニーチェは用心深く、狂人の物語の中に忍び込ませている。

「どのようにして海を飲み干すことができたのか。水平線の全体を拭き去るための海綿を誰が我々にくれたのか。この地球をその太陽の鎖から解き放したとき、我々は何を為したか。」⁶²

ニーチェが示したこれらの喩えを、ハイデガーは以下のように解釈している。

「全視界が拭き去られてしまった。存在者としての存在者の全体が、海が人間によって飲み干されてしまった。なぜなら、人間は立ち上がって ego cogito の自我性の内へと蜂起したからである。この蜂起とともに一切の存在者は対象となる。存在者は、客観的なものとして、主観的であることの内在の内へと飲み込まれる。水平線はもはや自ら進んで照り映えはしない。それは今では辛うじて力への意志による価値諸設定において定立された視点であるにすぎない。」⁶³

海、水平線そして地球を自然という一語でまとめるならば、それは「世界像の時代」において技術の対象としてのみあるにすぎないものと言えよう。ハイデガーは「神を殺害すること」と人間の存立保証との関連を次のように述べている。

「神を殺害することは、それによって人間が物質的、身体的、心的、精神的な諸存立を己れのために保証する存立保証(Bestandsicherung)において遂行される。しかし、人間がこのように諸々の存立を保証することは、自分自身の確信のためであり、その確信は、存在者の存在つまり力への意志に対応するために、対象的となり得るものとしての存在者に対する支配権を欲しているのである。」⁶⁴

⁵⁴ S.100

⁵⁵ ebd.

⁵⁶ S.88

⁵⁷ S.92

⁵⁸ S.108

⁵⁹ S.256

⁶⁰ S.215

⁶¹ ebd.

⁶² ebd.

⁶³ S.261

⁶⁴ S.262

さて次に、先の狂人のその後について考えてみたい。彼は神殺害の共犯者の一人であるが、しかしこの狂人は「神様を信じない者たち」とは全く異なる。彼らは思考しないがゆえに、神を探ることができないのに対して、この狂人はこれら「在来の人間の平面」を越えはみ出しているがゆえに「神様はどこにいる」と叫ぶのである。

「ついに彼はもっていた提灯を地面に投げつけた。それは木端微塵に碎け、明かりは消えた。『私の来るのは早すぎた』、と彼はその後で語った。『まだ私の出番ではないのだ。この途方もない出来事はまだ道すがらであり、彷徨っている－それはまだ人間の耳にまで届いてはいないのだ。』⁶⁵

思考をやめた「神様を信じない者たち」の耳にまで、狂人の叫び声は届かない。ハイデガーが「今日の人間」というとき、前者が指されていることは間違いないであろう。彼らは「思考の耳」を持つことさえできていない。このことが深刻なのである。「その耳は、思考することを始めない限りは、あの叫びを聞き漏らすことであろう。幾世紀も前から称揚されてきた理性が、思考の最も執拗な敵対者であるということ、我々が経験してしまったときに初めて思考が始まるのである。」⁶⁶

これはもちろん、「理性的動物」という人間の伝統的な概念への批判ではあるが、しかしハイデガーは論中、「理性」とは別のものについて明示的に語っていない。この課題は、『芸術作品の起源』(1935/36年)が引き継ぎ、「詩作(Dichtung)」として語られることになる。

「詩作が非秘匿性への明らめる企投として、切り開きそして形態の輪郭へと先行的に投げるものは、開き(das Offene)である。開きを詩作が生じさせ、しかもまさに開きがようやく存在者のただなかで、存在者を輝きと鳴り響きへともたらすという具合に、である。」⁶⁷

また、本論がこれまで検討してきた内容からこうも言えるのではあるまいか。「芸術は真理よりも価値が高い。」⁶⁸とニーチェが主張する点に、「理性」とは別のものについてのヒントが隠されている。

と。ハイデガーの指摘をそのまま受け取れば、価値思考に浸りついているニーチェの芸術の観念は確かに危ういものではあり、「詩作」とこれを同列に扱うことはできない。しかし、大づかみに言って非「理性」としての芸術というものに、西洋形而上学を乗り越える可能性を探ることは許されるだろう。

おわりに

以上、論文「ニーチェの言葉『神は死んだ』」を見渡す定点の獲得を求めて、ハイデガーの所論を追跡してきた。中期ハイデガーの他の著作からの引用は『世界像の時代』のほかは極力控え、上記論文での論述を頼りに検討した。

要約すれば、「存在史」の観点からニーチェの「力への意志」の形而上学をニヒリズムとして読み解くこと、さらにこれを「西洋の歴史の根本運動」と断じることがハイデガーの戦略に他ならない。

また他方において、人間の問題もそこには伏在していた。人間は「主観」として価値を定立することによって、存在者を対象化し支配する。これとは裏腹に、もはや存在それ自身が立ち現われにいたることがない。簡潔に言えば、こうした事態に思いを致さないのが「今日の人間の形勢と場所」ということである。

しかし、最終節でも言及したように、「思考の耳」を持たぬ「今日の人間」にハイデガーははたしてどのような処方を与えることができるのか。仮にそれが、「詩作」へのいわば覚醒であるとしても、一体いつになったら、「今日の人間」に「早すぎた」狂人の叫び声が届くようになるのか。中期ハイデガーにおけるこれらの点の精査が、次の課題となるとした上で本論を閉じたい。

【注】

引用は、Martin Heidegger: Holzwege, Gesamtausgabe Band 5, Vittorio Klostermann, 1977 から行い、ページ数を記す。[]は引用者による補い。なお、訳文はハイデッガー全集第5巻『杣径』(茅野良男訳、創文社、2002年)を基本的に利用した。

⁶⁵ S.215-216

⁶⁶ S.267

⁶⁷ S.60

⁶⁸ S.242